

山奥で飲んで食う人たち

よしおか のぼる
吉岡 乾 民博 民族社会研究部

有名なのに知られていない宗教
民族の垣根を越えて広く分布している宗教、いわゆる世界宗教のなかで、日本でもっとも知られていないのがイスラームだろう。

現代日本でイスラームといえば、何が知られているだろうか。酒を飲まず、毎日何度もお祈りをして、年に一回断食して、女性が顔を隠し、テロリズムが横行している？ 必ずしも間違えていない部分もあるが、そういうタブロイド思考はどうなのだろうか。酒は飲むわ、正月だけしか参拝しないわで、女性の社会進出が敢えて公約に掲げられ、意図不明の突発的な犯罪が頻発している、などと日本が評されたら、どう思うだろうか。もっと違った側面を見て欲しいと思う人や、自分はその人ではないと考える人だっているだろう。

覆された宗教観

パキスタンは、国民のほとんどがムスリム（イスラーム信仰者）である。一声にイスラームといっても、メジャーなスンニ派、シーア派に加え、国の北部に連なる山脈の谷々を中心に信仰されているイスマール派という少数派など



調査地であるファンザ谷。見渡したところでモスクは見当たらない

もある。暗殺教団の悪名で噂されたこともある宗派だが、僕が直接彼らの谷に調査に行つて感じたのは、とにかく「ゆるい」といった印象だった。

ラマザン月にムスリムが日中の断食をすることは広く知られているが、このイスマール派の人びとは普通に食べる。僕が断食をしていたら、問答無用で彼らに、窓を閉めてシャッターを半開きにした「隠れ食堂」へと引つ張つて行かれてしまったことすらある。一日五回の札拜もしないし、集落にはモスクもない。写真を撮つてくれとせがむ女性だっている。さすがに人目に付くところでは飲まないが、地元産ブドウからワインを、同じくアンズやクワの実から蒸留酒を作つて、飲んでいる。谷底でも海拔二三〇〇メートルはあつて、西日本のどの山の頂よりも高い地だ。僕も幾度となく飲まされては、すぐに酔い潰れた。

けれども、平穏平和な谷に暮らす彼らだつて、胸を張れるムスリムには違いがないのだ。